

愛海詩

えみし

あとりえ草創 (旭川市)
 やすひさ こうこ
大谷泰久・岬子
染色展
 4月26日～5月12日

特別号 No.35
 愛海詩の会
 会報
 平成25年4月30日発行
 編集発行人/ギャラリー愛海詩
 佐藤 睦子
 〒064-0821
 札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
 TEL・FAX/(011)613-1112
 WEBSITE
 http://www.emishi-s.com
 E-mail:kougei@emishi-s.com



また見ぬ自分

春風に誘われたかのように、かわいらしいお二人の中学生がギャラリー愛海詩にいらした。学校課外で茶道をしているとのこと。丁度、ギャラリー二階で茶道具の展示をしていたので、わかり易いように道具の説明をした。熱心にうなずき、話すので、私もついつい熱弁になってしまったのだが、楽しい一時であった。「将来、少しでも茶道具に興味をもって楽しんでくれるだろうか。いつの日かこの、一時を思い出すことなどあるのだろうか。すばらしい手仕事の作品を、少しでも解ってくれたらどうか。私は彼女達に語りつつ、何か胸の中からいろいろな思いが込み上げて来た。

子供達の未来はいつの時代も、大人が伝えることの如何によって、開かれたり、閉ざされたりする。二人の女の子と出合い、微かに未来が楽しく見えた。繋げて行くこと、出合いの中で職人、作家の手仕事を繋いで行く事、その事の大切さを改めて思う。

そしてまた、一つの言葉を使う。そう、「まだ見ぬ自分を見たいのだ」と言ったのは誰だったろう。きっと、職人、作家達はそんな言葉を無意識に思い作品を創っているのに違いない。

本当の創造、仕事というものは、自身の中心にじりじりと、まだ見ぬ自分を重ねて行くこと。マ・ネ・ビから自分らしさを放つこと。そこには、たおやかな、真っ直ぐな自分が居ること。ある種の残酷さに抗いつつ、楽しさや感動も内福しつつ。創造や仕事の中で「まだ見ぬ自分と出合う」そのことのすばらしさを感じる。

そういつた手仕事、職人、作家のすばらしい創造の賜物をみなさんへ繋げて行きたく思う春風の中。

(佐藤 睦子)

プロフィール

<p>大谷 岬子 埼玉県生まれ 東京芸術大学工芸科卒業 東京、旭川、札幌で個展開催のほか、北海道の美術、道展、日本クラフト展、高岡クラフト展、札幌芸術の森クラフト全国公募展などに入選。</p>	<p>大谷 泰久 旭川市生まれ 札幌西高卒業 京都、尾張一宮で草木染、染色、織、紡績等を修業。優佳良織工芸館染色室勤務を経て独立。伊丹クラフト展、札幌芸術の森クラフト展入選。旭川、工芸デザイン協会会長。</p>
<p>二人展 札幌・青森・弘前・盛岡・東京・大阪・金沢・博多・広島・浜松等多数 ・札幌グリーンホテルレストラン、スウェーデンヒルズゴルフ倶楽部、イタリアンレストラン、旭川大雪荘などに作品を納めている。</p>	

「あとりえ草創」の大谷泰久、岬子、工芸ギャラリー愛海詩で4年ぶり、7回目の作品展である。タペストリーを中心に、コースター、ストール（素材が竹で肌ざわりが良く、抗菌性に優れている）、敷物など約40点を展示する。倦まず撻まず、染色家として二人三脚で励んで来た二人。北海道が大切にしたい染色家である。作風は各々違い、お互いの領域を守り、認め、尊敬し合う二人である。22年の歩みを作品を通して楽しみたい。そして是非沢山の方々へ足を運んでいただきたい。

★大谷泰久
 ギャラリー滞在日
 5月2日(木) 午後1時から午後5時まで。
 作家との交流をさせていただきたく、お待ち申し上げます。



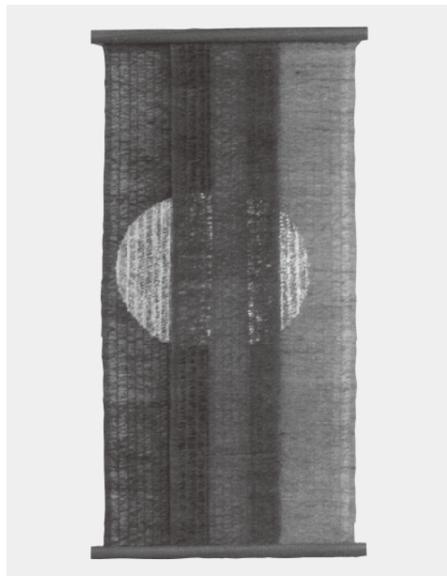
タペストリー「端午の節句」
 大谷岬子作、サイズ50cm×70cm。型染：麻生平
 上は空を悠々と泳ぐこいのぼり、下には菖蒲をあしらひ、かぶとを置く。毎年このタペストリーをかけることにより、端午の節句を楽しむ気持ちになれる。男のお子様へのプレゼントやご家庭で眺めつつ、季節を楽しめる素敵な作品です。



タペストリー「桜」
 大谷岬子作、サイズ50cm×80cm。型染：麻生平
 正に今の季節に愛でたい作品である。桜は「木の花」ともいひ、日本の国花でもある。幾重にも染めあげ遠近を出し、そこはかとない桜のはかなさ、優美さを表現している。お部屋にこの桜のタペストリーをかけて、花見酒でホロ酔い気分を楽しめそう...



タペストリー「猫柳と連雀」
 大谷岬子作、サイズ50cm×80cm。型染：麻生平
 伸びやかな線の中に春のよろこびを写し取ったかのような目を引く作品である。淡い黄、緑、桃の色、猫柳の白と連雀の黄色、各々の色が響き合い、まどやかな作品である。



タペストリー「月輪」
 大谷泰久作、サイズ50cm×80cm。型染：麻生平
 透ける筵のような麻の素材が活かしている。雲の間に月が見えかかっているような口マンが広がる作品である。
 この布との出合い等は下段の作家の挨拶の中にも書かれている。

『愛海詩の会』からのお知らせ
 来たる6月2日(日)、「写経と座禅」を下記の通り企画致しました。先着20名様です。お早めにギャラリー愛海詩までご予約下さい。
 場所：浄國寺、山の手2条12丁目11-5
 時間：午後1時30分～
 会費：3,800円(納経料2,000円含み、法話、お茶、お菓子付き)

ギャラリー愛海詩 お知らせ
 この春よりオープン時間を下記の通り、させていただきます。出会いの大切さを胸にお待ち申し上げます。
 午前11時30分より、午後6時まで。
 木曜日、午後1時より午後6時まで。
 月曜日、定休日。

ご挨拶
 ～作品展によせて～
 染色家 大谷泰久

数年前、馴染みの京都の生地屋で偶然見たのが「筵」。何となくではなく、その時に限って強い気持ちで動いた。値段を聞いてあまりの高額に驚いたし、三十年以上もおつき合い頂いている店の人もクエスチョンマーク一杯の顔で何するの？と珍しく五月蠅いほど尋ねられた。予感があったものの答えが出る筈もなく、帰ってからは筵と莫座の本読んだり熱を上げた。入れ込んでた割には届いた直後からすっかりその存在を忘れ数年が過ぎてしまった。

数年後、金泥や銀泥では無くもつと虹彩を放つ箔を作品に用いたいと考えた時に思い出したのがコレ。筵と云えば最初に思いつく言葉は映画でお馴染みの農民一揆の旗(他の言葉で説明した方が今回の説明にはピッタリだったので)が、放送禁止用語の壁が厚くて私の能力では無理でした。金箔とは凡そ入れ合わないシロモノだが、根っからのひねくれた精神にはピッタリ。「黄金の筵じゃ」とこの時だけ太閤秀吉の精神が取り憑いたらしい。

云うは易いが誰に尋ねるわけにも行かず、例外なくこの時も展示会間際。こんな感じだろうと最初に思っただけの事は全部が裏目に出た。諦めれば良いのにという回りの視線を気にしながら続けたら、何故か出てしまった。要は接着する糊を惜しまず使うことだった。

コレに箔が置ければもう怖いモノは無い。十数年来手がけているタペストリー「霞」の粗い麻生地も何のその。本物の太閤さんでは無いので流石に筵に純金は及び腰でアルミ蒸着を使用したのだが、それは今も続いている。何故ならそのために予想外の技法を偶然発見したからで、面白くて仕方が無い。

今後の戒めは憶えた事は何にでも使いたがるのでどうやって自分を止めるか。